書評

『よるべなき両親』

M・J・ランゲフェルト著
和田修二監訳
玉川大学出版部

書評を書くように言われて、ランゲフェルトの最近の講演集である『よるべなき両親』を手にした時の私の思いは、なんとも複雑なものだった。

三年程前、私はランゲフェルトと大変意味深い出合いをしていたからである。それは私が保育学研究室に入れていただいたばかりの頃であった。母となり四年目のことで、子どもとの一体感に自分を生かし切り、「導く前にいたわるべき人、教える前に慰むべき人」（倉橋惣三）であったといわれる「日本の母親像」にidentify し切れない自分を感じながら、かといって「家庭と仕事の両立」といい、昼は仕事、夜は育児と人格を使い分けるような生き方にも同一化できずに対極にある二つの価値の間を振れ動きながら、なんとかして自分なりのあり方をつかみ子どもとの日々をもっと安定した落着いたものにしたいと感じていた。それには、迷いの渦の中でもがいているだけでなく、こんなにも私の中に入り込み、私の今までを根こぎにする存在である子どもとは一体何なのか、少し距離をおいて見つめ直すところからやり直してみようと児童学を学び始めたのだが、そういう時期に出合った最初の感銘深い書物がランゲフェルトの『教育と人間の省察』だったのである。

「人間は内から形づくられ」「それぞれ自己自身に対する内的関わりをもつ」「人間は決してすでに出来あがった人間として生れてくるのではなく」まず子どもとして生まれ「子どもは教育によって始めて人間となる」。「一体人間は何故生きているのか、そして何故仕事をし、危険を冒し、緊張と抑圧に満ちた日々を送るのであろうか。この疑問に対しては、ただ我々が価値を経験し、その実現の為に生きている、と考える以外にない」。価値の実現は主体の自己決定と深く関わり、人間にとって「自己決定は真に人間の名にふさわしい実在の創造である。そ

して人間が自らを決定しなければならない存在である事が、実は人間にとって教育が必要であり、かつ又可能であるゆえんでもある」「人間が自らつくり出す最高の作品たる人間自身と、その世界の創造に対して教育という営為における人と人との関わりこそは、本質的かつ第一義的に、しかも国や時代をこえて普遍的に貢献する重大な積極的行動なのである」という形で表現されたランゲフェルトの人間観、教育観、感動的な実践例は子どもの事、保育の事を学び始めたばかりの私には、余りにも偉大過ぎるものであったが、続いて読んだ彼の『続人間と教育の省察』のある箇所はその後の私にとって大きな意味をもつものになったのである。その箇所を引用して以後の私の歩みを述べて書評にかえたい。

「動物は必然的な過程として発育し、必ず大人になるが、人間は必ずしも無条件的に成人になるとは限らない」「子どもが人間として成長してゆく過程では『自然』から『文化』への移行が是非とも行なわれなければならない」それは「脱自然化」の過程と言うこともできる。その過程の中で「成功したかに見えても、子どもの態度や行動のしかたが、どことなく不自然に見えたり、子どもの内にできれば自然のままに、気ままに振舞いたいという願望が潜んでいる場合は、教育するものが〈自然によって規定されている在存〉としての子どもを〈文化によって規定される存在〉へと導きもたらすに当って、子どもの内なる如何なるものをも壊すことなく極めて自然な形で事を運ぶ術を心得ていないために起る失敗である」「子どもにおける自然から文化への移行がもし順調に進展していないように見える場合、なによりもその子に対する教育が不十分不適切ではなかったかということがまず第一に問題にされなければならない」「なぜならば食餌、排便などに際して子ども自身がそれをコントロールできるように躾けることは彼の内なるものに何らショックを与えることなく実現することが可能であり、事実まことに正常に首尾よく行なわれているのが通例である」という箇所である。

私は子どもの食事、排泄、その他の基本的習慣づけに、大きな時間と労働を費してきて、その頃もいわゆる躾などの問題でいつも子どもとの関係がギクシャクしたものになってしまうことに疲れ果て、母親失格を感じていたので、ランゲフェルトの、人間とその陶冶に関する深い探求と思索から生れたこの広大な書物の中では、言わば小さなものにすぎないこの箇所が深く心につきささったのだろう。だから私の子ども学はその失敗を取り返し、適切な教育とは何かを探るとい

う課題を負ってスタートしたとも言えるのである。

その重い遅々たる歩みの途上で、私は子どもを人間の本質的原型的存在としてとらえ、子どもの行為をその内面の世界の表現として見るという保育の見方を学んだ。そういう視点にたって、子どもとの生活を、とにかく楽しいものにするということだけを心がけて交りを重ねていくうちに、思いがけない時に今まで気づかなかった子どもの心の動きが見えてきて、素直にそれと向かいあい自然にそれに答えている自分を発見するという体験が少しずつたまっていった。それらの体験の一つ一つを何回もとり出して、その時の子どもと自分の間で起っていたことの意味を考え続けていくおもしろさとむずかしさ。そういう省察の道程の中で、食べることや排泄に関するエリクソンの理論にふれ人間の行為を考えるいろいろな立場があることを知って見方が広がった。そして今、保育の場にあらわれた人間の現象を私は私独自の立場からとらえ、考えているに違いないということに気づかされている。なぜなら、保育とはその子と私が、多くの可能性の中からそれぞれの全人格をかけて選びとった一つの生をそこで共に生きることであり、それは今、目の前にいるその子の表現であると同時に私自身の表現でもあるから。

「自分自身の立場を意識化し、その立場でとらえたものを普遍的な人間の現象として他の人に理解してもらうための私の方法を確立すること」が今後の課題である。そこで私は、教育的人間学のすぐれた実践者としてのランゲフェルトの実践記録を是非みたいと思う。ランゲフェルトは「必然的に意味を伴う人間の『生』を追求する学問が従来のいわゆる『科学』とは全く異なるものであるはずだ」と言っているからである。

このような道程を経て、『よるべなき両親』によってランゲフェルトに出合い直した私は、かつてとらえきれなかった彼の思想が自分にとってずっと身近なものになっているのを感じ驚いている。それは私が多分その間にランゲフェルトの理論を裏づけるような経験をいくつか持つことができたからだと思う。そういう経験によって彼の思想の意味の大きさをもっと奥深いところで理解できるようになった気がしている。

ランゲフェルトは『よるべなき両親』の中で人間を「絶えず自分の限界を突破し、自分の境界を乗りこえるという最高の可能性ゆえにかえって本質的に寄るべなき存在である」ととらえ、「人間の歴史は本来自身がよるべないにも関わらずそのよるべなさに耐えて自分より無力でよるべないものへの愛のために、自らそ

の責任を引き受ける覚悟をした多くの無名の人々による日常不断の努力の集積として発展してきたのであり、そのようなおとなの元でのみ、子どもは子どもであることができるのである」といっている。

理性だけをみがき、合理性だけではつかめない人間の側面を見つめることを怠ってきた人類の生の所産であるこの現代は「人間的に生きるとは何か」という問いが真にさし迫って問われている時といえる。私はこの『よるべなき両親』がそういう現代を生きるすべてのおとなに向って「自分の限界を突破し、自分の境界をのりこえるという人間だけがもつ最高の可能性」をめざして「揺るぎなき世界」をつくることを訴えた告発と激励の書として位置づけたい。

私は『よるべなき両親』の中の「子どもとの日常的交りはおとなが子どもに対する己れの教育的課題と責任を自覚した時に教育に変わるのである」という理論によってランゲフェルトとの出合いを、私の「教育するものとして」の出発として位置づけ、その後の保育学の歩みを「人生の意味に対する問いへの実質的な回答となりうる、責任のある、信頼のおける、有能な生活を創り、全きおとな」をめざす「自己実現」の道程の中でとらえる視点を与えられたことをおぼえておきたい。そして又、『よるべなき両親』によって、「教育」と「保育」を自分の中で明確にしていくという新たな課題を持てたこともここに記しておきたいと思う。最後にランゲフェルトの考えの一つを実証すると思われる私の体験を記してこの文を結びたい。

「真の従順さは屈従的反応ではなく、自信を増すことから生れる態度である。この自信は隷従の上ではなく、正当な自己への信頼と確かな能力の伸長を経験し自覚することを通して生れるのである」

この夏休みも、娘は親をはなれて、知りあいの郷里で数日を過してきた。去年は帰って来た翌朝、自分の背を私に計ってもらうという行為でその内面の成長の自覚を表現した娘は、今年は、見違えるような「従順」さでそれを表現している。自分から手伝いを引き受け、頼んだことも自信に満ちて片づけていくのである。この頃の我が家の動きは何と自然なことか。

ここで、今、子どもの中で起っているそのことを「従順」と言ってしまわず一つの人間現象としてその意味を見極めようとするのが保育学の立場なのである。

（小宮山雅代）